

資料 2-1

薬科学専攻修士課程

平成 29 年度 授業計画書

平成 29 年 4 月 1 日

東京薬科大学大学院の三つの方針

東京薬科大学大学院の修了認定・学位（修士・博士）授与の方針 （ディプロマ・ポリシー）

東京薬科大学大学院では、人類と生命を慈しみ、科学技術の発展および人類の福祉と健康に貢献するための高度な研究能力と学識を持ち、国際社会で活躍できる意欲的かつ高い能力のある人材の養成を目的とします。東京薬科大学大学院は、各研究科で定めた所定の単位を修得し、所定の能力を備え、学位審査に合格した大学院学生には修了を認定し、学位を授与します。

東京薬科大学大学院の教育課程編成・実施の方針 （カリキュラム・ポリシー）

東京薬科大学大学院では、最先端の研究活動を通じて、薬学・生命科学領域における広範囲な基礎的・先進的知識と技能を修得し、自ら問題点の抽出と問題解決を進めていくことが実践できる人材を育成するよう各研究科での大学院教育を行います。

東京薬科大学大学院の入学受入方針 （アドミッション・ポリシー）

東京薬科大学大学院では最先端の研究活動を通じて、薬学・生命科学領域における広範囲な基礎的・先進的知識と技能を修得し、自ら問題点の抽出と問題解決を進めていくことが実践できる人材を育成するために、学士あるいは同等の学位を持ち、かつ以下の能力を持つ大学院学生を求めています。

東京薬科大学が求める大学院学生像

- 1) 研究者・技術者として社会に貢献したいという強い意志を持っている。
- 2) 豊かな人間性を養うために積極的な自己研鑽に励むことができる。
- 3) 相互理解のための表現力・コミュニケーション能力に優れている。
- 4) 基礎学力があり、高い勉学意欲を持っている。
- 5) 国際的な視点と倫理性と高い教養を持っている。
- 6) 自ら果敢に新たな分野の開拓等に挑戦することができる。

「三つの方針」 薬学研究科

薬学研究科の基本理念・目標

薬学研究科は、人類と生命を慈しむ心と、科学技術の発展および人類の福祉と健康に貢献するための薬学研究を推進できる高度な研究能力と学識を持ち、国際社会で活躍できる人材の養成を基本理念・目標としています。特に、高度医療、医薬品開発、大学教育などの分野において薬学研究者としての視点を有する医療人および指導者の養成に主眼を置いています。

なお、社会人課程では、医療機関、行政機関、企業等に在職中の社会人を受け入れ、上述した能力を持つ人材を養成します。

薬学研究科の修了認定・学位授与の方針

(ディプロマ・ポリシー) : 修士(薬科学)

薬学研究科の基本理念に基づき、特論講義、演習、実習および課題研究を通じて以下にあげる専門知識と研究能力を身につけた上で、所定の単位を取得し、学位申請論文を提出して薬学研究科委員会が実施する最終試験に合格した大学院学生には修了を認定し、学位(修士(薬科学))を授与します。

- 1) 研究者としての基本的な学識と英語力を身につけている(基本的学識と国際力)。
- 2) 自身の研究課題について、調査、実験、解析する能力を身につけ、かつ文章および口頭で伝え、議論できる(思考力、判断力、表現力)。
- 3) 専攻した領域の知識を理解し、新たな課題に取り組む能力を身につけている(専攻領域の基礎知識と解決能力)。
- 4) 科学技術の進歩および福祉と健康に貢献する科学者としての人間性と倫理観および使命感を身につけている(人間性、倫理性)。

薬学研究科修士(薬科学)課程の教育課程編成・実施の方針

(カリキュラム・ポリシー)

薬学研究科では、特論講義および演習・実習で様々な研究分野の知識を身につけ、それを駆使して課題研究と論文作成を行う中で研究分野の技能と医療に関わる者としてふさわしい態度を磨き、自ら問題解決を実践できるように指導します。また、主指導教員(指導教授または准教授)は、副指導教員とともに課題研究と論文作成を指導します。なお、副指導教員は対象学生の所属する教室(研究室)とは別の研究科委員が担当し、各々評価を行います(副指導教員制度)。

- 1) 英語および専門領域の特論において、基本的な学識と英語力の修得を図ります。
- 2) 演習および実習において、思考力、表現力等の修得を図ります。
- 3) 課題研究において、専門知識と新たな課題に取り組む能力の修得を図ります。
- 4) 医療に関わる者としての態度を養成するために e-learning 等を活用し、研究倫理等の徹底を図ります。

薬学研究科修士（薬科学）課程の入学受入方針 （アドミッション・ポリシー）

薬学研究科は、修了認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）および教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）に定める教育を受けるために必要な、以下にあげる人材を求めます。

- 1) 探究心および学修意欲を持ち、自己研鑽に積極的に取り組むことができる。
- 2) 責任感や倫理観が強く、協調性を持っている。
- 3) 化学および生物学などの自然科学系のみならず、国際化に対応する語学力を身につけている。
- 4) 医薬品創製に関する研究を介し、人類の健康と福祉に寄与したいという強い意志を持っている。

大学院薬学研究科薬科学専攻修士課程における修士学位審査の基準

修士の学位は以下の基準に基づいて審査される。

- 1) 修士（薬科学）学位論文は、薬科学分野において新規性・独創性の観点から優れており、学術的意義を有していること
- 2) 修士（薬科学）学位論文は、得られた結果に基づき論理的かつ明解であること
- 3) 修士（薬科学）の学位を授与される者は、関連研究分野における背景に関し十分な知識を有し、その研究分野における課題を解決する能力を備えていること
- 4) 修士（薬科学）の学位を授与される者は、豊かな人間性と倫理性を備え、創薬科学の発展に寄与できる資質を有していること

I. 教務に関する事項

1. 研究分野

本大学院薬学研究科薬科学専攻修士課程は次に示す 7 研究分野からなっている。

薬品分析化学、生薬学、創薬有機化学、創薬生化学、分子衛生化学、分子創剤制御学、生体機能制御学

2. 講義

- (1) 別表による 7 科目の選択講義は、1～2 年次に 3 科目 6 単位以上の修得が必要である。
- (2) 「英語特論 I、II」は 1 年次の必修科目で、2 科目 4 単位の修得が必要である。
- (3) 「演習」及び「実習」は所属教室において行う。演習は 4 単位、実習は 6 単位の修得が各々必要である。

別表

薬学研究科薬科学専攻修士課程授業科目及び配当単位数一覧表

授 業 科 目	配 当 単 位 数		配当年度	備 考
	必 修	選 択		
創薬有機化学特論		2	1・2	平成30年度 開講予定
薬品分析化学特論		2	1・2	平成29年度 開講
生薬学特論		2	1・2	平成29年度 開講
創薬生化学特論		2	1・2	平成30年度 開講予定
分子衛生化学特論		2	1・2	平成29年度 開講
分子創剤制御学特論		2	1・2	平成29年度 開講
生体機能制御学特論		2	1・2	平成30年度 開講予定
英語特論Ⅰ	2		1前	
英語特論Ⅱ	2		1後	
演習Ⅰ	1		1前	
演習Ⅱ	1		1後	
演習Ⅲ	1		2前	
演習Ⅳ	1		2後	
基礎実習	3		1前	
応用実習	3		1後	
課題研究	10		1～2	
要修得単位数	24	6以上		

【選択科目の履修方法】

本課程の学生は、1～2年次に選択科目の中から3科目6単位以上、必修科目との合計30単位以上を修得しなければならない。

平成29年度薬科学専攻 授業日程（前期）

月	火	水	木	金
英語特論Ⅰ	薬品分析化学 特論	分子創剤制御学 特論	分子衛生化学 特論	
生薬学特論				

平成29年度薬科学専攻 授業日程（後期）

月	火	水	木	金
英語特論Ⅱ				

4月6日（木）講義開始

専門科目は、選択する科目の履修申請を、所定の期日までに所定の用紙にて本学薬学事務課まで行うこと。

II. 特論単位認定に係る試験

履修した特論科目については、原則として講義終了後に試験を行い学業成績を考査する。合格した科目については、所定の単位の修得を認める。

なお、各特論において講義実施時間数の3分の2以上出席しなかった者には受験資格を与えない。試験を、疾病その他やむを得ない理由で欠席した者は、指導教授または准教授の承認（署名・捺印）を得て、試験終了日より起算し3日以内（土日祝日は除く）に所定の届け出用紙に、診断書等の証明書を添付して、薬学事務課大学院係へ提出すること。欠席届が認められた者は、特論取り纏め担当者の指示に従い、追試験もしくはレポート課題等を受け、その結果に基づき単位認定の可否が判断される。

1. 成績の評価

成績の評価は以下の表に示す通りである。

評価	合・否
A	合格
B	合格
C	合格
D	不合格

なお成績の評価は原則として、出席、受講態度、および記述試験の得点状況から、総合的に行う。A～Dの目安は以下の通りである。

A：出席状況(2/3以上)、受講態度(良)、記述試験(80点以上)

B：出席状況(2/3以上)、受講態度(良または普通)、記述試験(70点以上)

C：出席状況(2/3以上)、受講態度(良または普通)、記述試験(50点以上)

D：出席状況(2/3未満)、受講態度(普通または不良)、記述試験(50点未満)

2. 単位の認定

履修した特論科目については、原則として特論講義の最後のコマに記述試験を行い、その結果と出席状況やレポート等の内容も含めて、総合的に成績を考查する。合格した特論科目について、所定の単位修得を認める。

3. 課程修了に必要な特論単位数

(1) 専門科目は、7科目(いずれも2単位)を開講する。以上の内3科目6単位以上を1～2年次に修得する。

(2) 英語特論は必修で、IとIIが各々2単位である。これら2科目合計4単位を1年次に修得する。

III. 演習と実習

演習と実習は必修で、各学生が所属する教室または研究室で実施される。以下に、演習と実習の具体的内容の例を示す。

1. **演習**：研究テーマに関係する学術論文の検索方法、その読み方、データのまとめ方、学会発表の仕方等を修得する。

2. **実習**：化学物質の取扱い、実験動物の取扱い、検査キットや測定機器の使用方法等、研究テーマに関する実験の遂行あるいは調査を行うための基礎知識と技能を修得する。

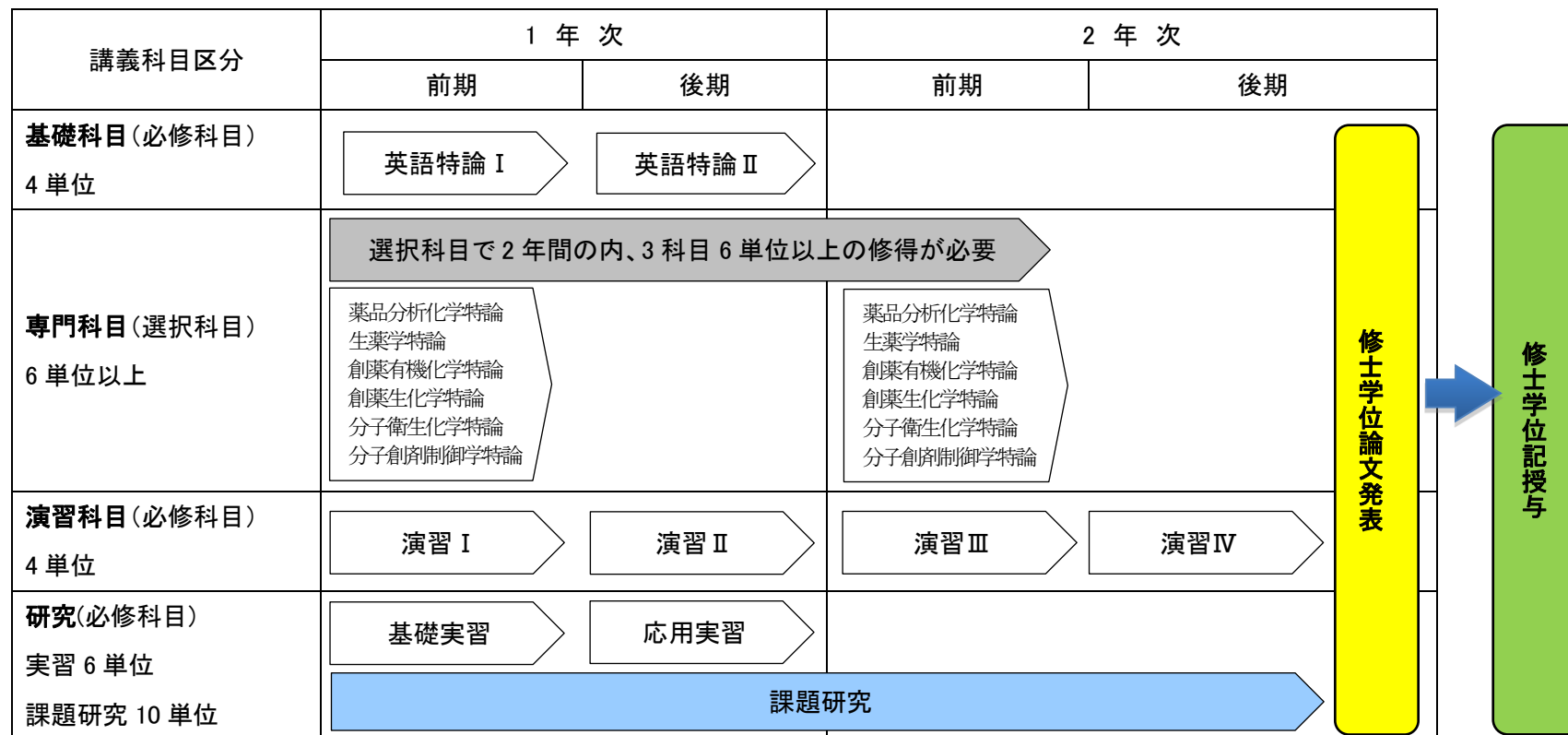
IV. 課題研究

学生は、所属した教室において、課題研究として独自の研究を行い、その成果を修士論文として纏める。

課題研究テーマは各研究分野によって様々ではあるが、本課程では薬学関連領域で医薬品創製に関する研究を介し、人類の健康と福祉に寄与する薬学研究者を養成する。

修了までの道のり

薬学研究科 薬科学専攻 修士課程



- 演習 I** : 所属教室が開講するセミナーにて、研究テーマに関係する学術論文の検索方法およびその読み方についての指導を受ける。
- 演習 II** : 研究テーマに関連する論文検索を行い、セミナーで紹介(発表)できるようにする。発表では内容を纏めた資料を作成し、教員および大学院生に提示する。発表内容に関する質疑応答が出来るようにする。
- 演習 III** : 研究テーマでの実験データの解析(統計処理など)の指導を受ける。引用文献などの資料も併せて実験内容を纏め、セミナーにて発表できるようにする。学会発表会を想定し、質問への応答が出来るようにする。
- 演習 IV** : 学位論文審査での提出論文を作成するための研究結果を纏め、論文の構築を検討する。研究成果を学会で発表するための要旨作製し、口頭およびポスター形式での学会発表が出来るようにする。

- 基礎実習** : 化学物質の取扱い、実験動物の取扱い等について、研究テーマの実験を行うための基礎知識の指導を受ける。その後、研究テーマに関する実験に関する手技の修得を行う。
- 応用実習** : 基礎実習にて学んだ手技で得られたデータを解析し、実験技術の確認を行う。実験結果を演習 II で発表し、指導教員との意見交換で改善点などを検討し、再現性が高い実験操作を行い、かつ精度の高いデータを出せる実験が出来るようにする。

担当者：袴田秀樹、柳田顕郎、柴崎浩美、小谷 明、横川彰朋、東海林敦、森岡和大

■学習目標 (G10)

医薬品創製に不可欠な基盤技術である薬物や生体成分の分析法に関して、製薬企業や日本薬局方における試験法や分析法バリデーションの事例を通じて理解する。さらに、最新の機器分析技術を駆使する生体分子（遺伝子、タンパク質、代謝産物）やバイオ医薬品などに対する高性能分離法、高感度・高選択検出法、相互作用解析法、ゲノム解析法、体内動態解析法、血中薬物濃度モニタリング法、等に関する研究動向の最前線について学ぶ。

■行動目標 (SB0s)

- 1 日本薬局方の試験法について概説できる。
- 2 バイオテクノロジー応用医薬品（バイオ医薬品）の特徴と分析法について概説できる。
- 3 マイクロチップ電気泳動の原理および遺伝子 DNA やタンパク質解析への応用について概説できる。
- 4 ボルタンメトリーの原理および薬学領域への応用について概説できる。
- 5 製薬企業における CMC について概説できる。
- 6 創薬の各段階における分析化学の役割や手法について概説できる。
- 7 液体クロマトグラフィー (LC) における最新の分離モード、カラム、検出システム等について概説できる。
- 8 バイオセンサーについて概説できる。
- 9 生体分子を計測する際に利用される代表的な機器分析について概説できる。
- 10 マイクロ化学分析システム (μ TAS) および生化学分析手法への応用について概説できる。
- 11 体内動態解析のための、安定同位体トレーサー法について説明できる。
- 12 安定同位体トレーサー法による体内動態研究の応用例を説明できる。
- 13 臨床で用いられる質量分析法 (GC-MS、LC-MS) の基礎と応用が説明できる。
- 14 血中薬物濃度測定法の基礎と抗癌剤の測定への応用について説明できる。

■授業内容

(回数、講義内容、担当者、対応 SB0s)

- 1 日本薬局方に収載されている試験法について解説する (袴田) (1)。
- 2 従来の化学薬品の分析と比較しながら、バイオテクノロジー応用医薬品 (バイオ医薬品) の特徴と分析の考え方を解説する (袴田) (2)。
- 3 遺伝子 DNA やタンパク質の解析において、ハイスループット化・高感度化に活用されているマイクロチップ分析技術を解説する (小谷) (3)。

- 4 ボルタンメトリーおよび電気化学検出 HPLC などの例をあげて、電気化学分析法の基礎と薬学への応用を解説する（小谷）（4）。
- 5 製薬企業の CMC について解説する（袴田）（5）。
- 6 創薬の各段階において用いられる分析化学的手法を列挙し、それぞれの手法の原理や特徴を示すとともに、計測値の取り扱いに焦点を当てながら応用事例について解説する（柳田）（6）。
- 7 高性能化が著しい近年の液体クロマトグラフィー（LC）分離技術における最新の分離モード、カラム、検出システムを列挙し、それぞれの原理や特徴を示すとともに、応用事例について解説する（柳田）（7）。
- 8 バイオセンサーの種類や高感度バイオセンサーを設計する際に重要となるシグナル増幅能について解説する（東海林）（8）。
- 9 光分析や電気分析など、生体分子を計測する際に用いられる機器分析の原理や応用例を解説するとともに、最新の分析機器について解説する（東海林）（9）。
- 10 マイクロ化学分析システム（ μ TAS）の特徴および μ TAS に用いるマイクロチップの作製法、送液法、検出法、生化学分析手法への応用について解説する。（森岡、柳田）（10）。
- 11 安定同位体トレーサー法に用いられる安定同位体標識体の基準と合成法、同位体希釈質量分析法の利点とその限界について解説する（柴崎）（11）。
- 12 安定同位体トレーサー法による薬物と代謝物の分析例と体内動態解析への応用について解説する（柴崎）（12）。
- 13 臨床で用いられる質量分析法（GC-MS、LC-MS）の基礎と応用について解説する（横川）（13）。
- 14 分子標的抗癌剤を中心に、血中薬物濃度測定法の開発と臨床における体内動態解析への応用について解説する（横川）（14）。

■アクティブ・ラーニングの取組

各回の講義において、プレテスト、ペーパーワーク（リアクションペーパー含む）、口頭試問、レポート課題などを繰り返し、学習者からの質問や反応を随時確認しながら講義を進めることで、学習者が効率的に内容を理解できるように工夫している。

■成績評価方法

1) 形成的評価

- a：知識：講義時間中の小テストやペーパーワーク、口頭試問を繰り返し行う。
- b：技能：
- c：態度：受講態度の観察記録をつける。
- d：パフォーマンス：講義中に課題作業や口頭試問を行い、習熟度を確認する。

2) 総括的評価

a : 知識 : 講義中もしくは講義後の提出課題 (レポート等) により評価する。(50%)

b : 技能 :

c : 態度 : 毎回の出欠に受講態度を加味して評価する。(50%)

d : パフォーマンス : (上述の形成的評価のみ行う)

■教科書

各講義においてプリントなどを配付する。

■オフィスアワー

いつでも可。ただし、下記の各担当者へ事前に予約すること。

分析化学教室 (研究 2 号館 4 階) : 袴田、小谷

生体分析化学教室 (研究 2 号館 4 階) : 柳田、東海林、森岡

臨床薬学教室 (医療薬学棟 1 階) : 柴崎、横川

■準備学習 (予習・復習等)

学部の分析化学系科目で学修した内容を十分に復習し、理解した上で講義に臨むこと。

■学生へのフィードバック

ペーパーワーク (リアクションペーパー含む) や口頭試問などでの質問対応や解説等を通じてフィードバックする。

生薬学特論

1 年次前期 2 単位

担当者：三卷祥浩、一柳幸生、黒田明平、横須賀章人、蓮田知代、松尾侑希子

■学習目標 (G10)

薬科学専攻大学院生薬学特論として、生薬・天然物化学分野の研究手法、医薬品開発への展開、漢方・生薬製剤の基礎を学び、医薬品としての生薬・漢方薬の重要性、ならびに医薬品資源としての生薬・天然物の重要性を理解する。

■行動目標 (SBOs)

1. 生薬・漢方薬の歴史を説明できる。
2. 生薬・漢方薬の医薬品としての重要性を説明できる。
3. 代表的な生薬成分の抽出、分離、精製法を説明できる。
4. 機器スペクトルを用いた天然物の構造決定法を説明できる。
5. 機器スペクトルを用いて、基本的な天然物の化学構造を決定できる。
6. 代表的な生薬成分の基本骨格を列挙できる。
7. 代表的な生薬成分の生合成経路を概説できる。
8. 医薬品資源としての天然物の重要性を説明できる。
9. 天然物から開発された代表的な医薬品の基原と薬効を列挙できる。
10. 生薬・天然物成分をシーズとした医薬品開発の手法を概説できる。
11. 生薬・天然物研究におけるフィールド調査の重要性を説明できる。
12. 生薬・天然物成分の代表的な定性・定量分析法を列挙できる。
13. 生薬・天然物成分の生物学的分析法を説明できる。
14. 漢方薬の基礎概念を説明できる。
15. 代表的な漢方薬の適応症を概説できる。

■授業内容

(回数、講義内容、担当者、対応 SBOs)

1. 生薬成分の分離・精製 I (一柳) (3)
2. 生薬成分の分離・精製 II (一柳) (3)
3. 機器スペクトルを用いた天然物の構造決定法 I (一柳) (4)
4. 機器スペクトルを用いた天然物の構造決定法 II (一柳) (4、5)
5. 生薬成分の化学構造的分類と生合成経路 I (松尾) (6、7)
6. 生薬成分の化学構造的分類と生合成経路 II (松尾) (6、7)
7. 生薬の生物活性と化学構造 I (黒田) (9)
8. 生薬の生物活性と化学構造 II (黒田) (10)
9. 生薬の歴史と医薬品開発 I (横須賀) (1、2)

10. 生薬の歴史と医薬品開発Ⅱ（横須賀）（2、8、9）
11. 漢方薬の基礎概念と代表的な漢方薬の適応症（三巻）（1、2、14、15）
12. 生薬・天然物研究におけるフィールド調査と医薬品開発（蓮田）（10、11）
13. 生薬・天然物成分の定性・定量分析法（蓮田）（12、13）
14. 論述試験（三巻）（1～15）

■アクティブ・ラーニングの取組

講義ごとに十分に余白のある補助プリントを配布し、重要事項や板書事項を書き込ませるようにしている。

できる限り講義に演習を取り入れている。

■授業で行っている工夫

講義のはじめにキーワードを提示し、講義の概要を把握してもらった後に詳細な解説を行っている。

■成績評価方法

1. 形成的評価
 - a 知識：講義ごとにキーワードに関する口頭試問を行い、理解度をフィードバックする。（70％）
 - c 態度：受講態度不良者に対しては改善の指導をする。
 - d パフォーマンス：ポートフォリオを作成させ、提出を求める。（30％）
2. 総括的評価
 - a 知識：論述試験、提出物を総合的に評価する。（50％）
 - c 態度：受講態度により評価する。（20％）
 - d パフォーマンス：論述試験にパフォーマンス課題を取り入れる。（30％）

■教科書

なし。講義ごとに補助プリントを配布する。

■参考書

パートナー生薬学 改定第2版、南江堂
パートナー天然物化学 改定第3版、南江堂
薬学生のための漢方薬入門 第4版、廣川書店
その他、講義中に適宜紹介する。

■オフィスアワー

講義終了後、または講義終了後に予約すること。

■準備学習

予習は特に必要ない。

復習：補助プリントおよび補助プリントに書き込んだ内容を必ず復習し、次回の講義に臨むこと。

■学生へのフィードバック

講義の最後に口頭試問、もしくは小テストを行う。解答内容について理解度が不足している部分を指摘し、再度解説を行う。

■教員から一言

初めて生薬系科目を学ぶ受講生も多いと思われるので、基礎から分かりやすく講義を進める。

担当者：平塚 明、藤原 泰之、早川 磨紀男、小倉 健一郎、西山 貴仁、高橋 勉、篠田 陽、
藤野 智史、大沼 友和、恒岡 弥生、鍛冶 利幸*（*東京理科大学薬学部環境健康学教室）

■学習目標（GIO）

各種疾病の様々な角度からの原因究明や化学物質の健康影響とその作用機構解析を通じて疾病予防に貢献するために、環境ストレスの生体影響と生体応答・生体防御機構ならびに医薬品を含む化学物質などのヒトへの影響と適正な使用などに関する基本的知識および最新の研究成果について学ぶ。

■行動目標（SBOs）

1. 酸素の功罪を理解し、活性酸素の種類について説明できる。
2. 酸素ストレスに対する防御システムを概説できる。
3. 生理的、病理的条件下における活性酸素の産生について説明できる。
4. 低酸素ストレスについて説明できる。
5. 酸素ストレスと細胞内情報伝達について概説できる。
6. 薬物代謝酵素とその変動要因について概説できる。
7. 代表的な薬物代謝酵素について説明できる。
8. 化学物質の生体内代謝様式について説明できる。
9. 化学物質の代謝的活性化と不活性化について説明できる。
10. 化学物質の特性を理解し、毒性発現機序について説明できる。
11. 代表的な薬害とその発生機構について概説できる。
12. 化学物質によるヒトへの影響と薬物代謝酵素との関係について説明できる。
13. 薬物代謝酵素の遺伝的多型性と化学物質によるヒトへの影響の関係について説明できる。
14. 解毒を担う薬物代謝酵素の発現制御機構について概説できる。
15. 環境汚染物質の健康影響評価とその対策について概説できる。
16. 医薬品類の水環境汚染の現状について説明できる。
17. 水俣病とその原因汚染物質であるメチル水銀の毒性発現機構を説明できる。
18. 有害金属類の毒性発現機構について説明できる。
19. メタロチオネインの生理的役割について説明できる。
20. メタロチオネインと疾病予防との関連について説明できる。

■授業内容

（回数、講義内容、および担当者と対応 SBOs）

1. 酸素の功罪、活性酸素の種類、酸素ストレス防御システム（早川）（1, 2）
2. 生理的、病理的条件下における活性酸素産生、低酸素ストレス（早川）（3, 4）
3. 酸素ストレスと細胞内情報伝達（早川）（5）

4. 肝硬変・肝再生と核内受容体（藤野）（4）
5. 化学物質の代謝に関与する酵素系（平塚）（7, 8, 9）
6. 薬物代謝酵素が関与する薬物の副作用発現機序（西山）（6, 10, 11, 12, 13）
7. 代表的な薬害とその分子メカニズム（小倉）（11, 12, 13）
8. 生体防御酵素の亢進によるがん予防メカニズム（大沼）（14）
9. 環境汚染物質の健康影響評価とその対策（藤原）（15, 16）
10. 血管系に着目したメチル水銀の毒性発現機構（鍛冶^{*}）（10, 17）
11. 神経系に着目したメチル水銀の毒性発現機構（篠田）（10, 17）
12. ヒ素の毒性発現機構（高橋）（10, 18）
13. メタロチオネインの生理的役割並びに疾病予防との関連（恒岡）（2, 19, 20）
14. 記述試験（平塚）

■アクティブ・ラーニングの取り組み

学生と意見交換しながら講義を進める。

講義資料、補助プリントを配布し、必要箇所に書き込みをさせる。

講義によってはレポートを提出させることもある。

■成績評価

1) 形成的評価

- a. 知識：到達レベルを繰り返し確認させる。（100%）

2) 総括的評価

- a. 知識：定期試験、提出物を総合的に評価する。（80%）
- b. 態度：出席状況、受講態度（20%）

■教科書

各講義においてハンドアウト資料を配布する。

■オフィスアワー

在室時であればいつでも可。外部講師に対する質問等は、可能な限り講義終了後に行なって下さい。尚、その後の質問等の対応は担当教室の教員を通じて行います。

■準備学習（予習・復習等）

講義資料、補助プリントを活用し理解を深める努力をする。

教員名：根岸 洋一、多田 墨、北垣 邦彦、井上 勝央、白坂 善之、山田 安彦、
高柳 理早、松村 学**、瀬田 康生、益山 光一

■学習目標 (G10)

医薬品開発や医薬品の適正使用に関する基本的な概念を理解するために、本特論では、ADME/Tox 評価、製剤・DDS研究などの創薬研究分野、薬効評価・投与設計などの臨床研究分野及び承認申請に関わるレギュラトリーサイエンス分野における最新の研究例やトピックスについて学ぶ。

■行動目標 (SBOs)

1. タンパク質医薬品のための DDS 技術について概説できる。
2. 核酸医薬品のための DDS 技術について概説できる。
3. ナノ粒子製剤の現状と課題について概説できる。
4. ワクチンの活性発現メカニズムと DDS の関係性について概説できる。
5. 医薬品の開発から承認までのプロセスと法規範について概説できる。
6. 治験の意義と仕組みについて概説できる。
7. 薬物の体内動態を変動させる因子を説明できる。
8. 薬物の体内動態を解析する手法や予測する方法論を説明できる。
9. 創薬と臨床における薬物動態研究の意義と役割について説明できる。
10. 薬剤評価学の重要性を説明できる。
11. 医薬品の効果・副作用を薬物動態学および薬力学から理論的に評価するための基本的知識を修得する。
12. 画像診断薬（造影剤、放射性医薬品など）について概説できる。
13. 遺伝的素因を考慮した薬物治療について概説できる。
14. コンパニオン診断にもとづく薬物治療について概説できる。
15. 医薬品候補化合物がどのように創成されているのか概説できる。
16. データパッケージについて説明できる。
17. 審査報告書からデータパッケージに必要な情報を収集できる。
18. リスク管理計画 (RMP) の最近の動向から、各々の医薬品のライフサイクルマネージメントに必要な内容を修得する。

■授業内容

(回数、講義内容、担当者、対応 SBOs)

回数	月日	担当	タイトル	講義内容
1	4/12	根岸	バイオ医薬のためのデリバリー技術とその応用展開	バイオ医薬品（生理活性タンパク質や核酸医薬）のためのDDS技術と開発の動向（SBOs1,2）
2	4/19	多田	ナノ粒子製剤の現状と問題点	ナノ粒子製剤の宿主異物認識システムによる排除機構に起因する問題点とこれらの解決方策（SBOs3,4）
3	4/26	北垣	医薬品の承認制度	医薬品のシーズ調査から承認、市販後までの医薬品ライフサイクルの制度（SBOs5）
4	5/10	北垣	治験の意義と仕組み	治験の実施に関する我が国の法規範（SBOs6）
5	5/17	井上	薬物動態の分子基盤	薬物動態を支配する生体内ルールとその制御に関わるタンパク質分子（SBOs7）
6	5/24	井上	薬物の体内動態特性を考慮した薬物治療の最適化	各種薬物の体内動態特性の理解とその機構を応用した薬物療法の提案（SBOs7,8,9）
7	5/31	白坂	創薬と臨床をつなぐ薬物動態研究	創薬における薬物動態研究の意義と薬物-薬物間相互作用を含む薬物動態予測の現状（SBOs7,8,9）
8	6/22*	山田	薬剤評価学（1）*	薬物動態学および薬力学に基づく医薬品の評価（SBOs 10, 11）
9	6/22*	山田	薬剤評価学（2）*	薬物動態学および薬力学に基づく医薬品の評価（SBOs 10, 11）
10	7/5	松村**	製薬企業における画像診断薬の開発	画像診断における造影剤や放射線医薬品の役割、各種疾患における画像診断（SBOs 12）
11	7/12	松村**	医薬品開発と個別化医療	バイオマーカー、トランスレーショナルリサーチとは。各種がん治療の分子標的薬について（SBOs 13,14）
12	7/19	瀬田	“くすり”らしい化合物とは？	医薬品として使用されている化合物は一定の性質を有している。その性質とはどのようなものかについて（SBOs 15）
13	7/26	益山	既承認事例から学ぶ承認基準とRMP	承認に必要なデータパッケージ等について（SBOs16,17,18）

* 6/21分は6/22（4～6限）の薬学部 臨床薬理学特論として開講

**外部講師：松村 学 元第一三共株式会社

■アクティブ・ラーニングの取組

- ・各回に補助プリントを配布し、講義を進行しながら、空欄部分を記入させるようにしている。
- ・各回に学生を指名して発表させている。
- ・各回に学生同士が討議する時間を設けている。

■成績評価方法

1) 形成的評価

- a : 知識 : 講義中の口頭試問を行い、理解度をフィードバックする。(60%)
- b : 態度 : 受講状況 (出欠等) を記録する。(20%)
- c : パフォーマンス : 講義中に提示した課題について議論を行い、理解度を確認する。(20%)

2) 総括的評価

- a : 知識 : 定期試験、出席点、提出物を総合的に評価する。(60%)
- b : 態度 : 受講状況 (提出物等) を加味して評価する。(20%)
- c : パフォーマンス : 学生同士や教員との議論内容にて評価する。(20%)

■教科書

各講義においてプリントを配布する。

■オフィスアワー

講義終了後、または講義終了後に予約すること。

■準備学習 (予習・復習)

- ・講義一週間前を目途に講義資料や必要な資料等を配布又は指示するので、事前に読んでおくこと。
- ・講義資料及び書き込んだ内容を復習すること。

■学生へのフィードバック

課題 (レポート等) に対するフィードバック

英語特論Ⅰ（英語によるプレゼンテーション）

1 年次前期 2 単位

担当者： Kevin Miller ミラー ケビン

■学習目標 (G10)

このコースでは、科学的な内容について英語でのプレゼンテーションが出来るようになることを目標に、英語をもちいて発表するための演習を総合的に行なう。簡単な語法、表現のエクササイズに始まり、特に自分の意見を効果的に表現する方法を練習する。英語のプレゼンテーション原稿を作成すると同時に、それをプレゼンテーションソフトを使って発表する。毎回、語法、表現のエクササイズと同時に、受講者が書いた英文を提示しながら、いっしょに英語表現を考えるワークショップも行なう。

■行動目標 (SB0s)

- クラスのトピックについて英語で意見を表明し、他の人の意見に英語で応答する。
- 必要なときに先生、または他の学生に英語で確認する。
- 完全な英語の文を書き、必要なときにスペルや文法を修正する。
- 口頭発表の準備のために、研究テーマについて、段落を使って構成の整った英文を作成する。
- 研究テーマに関する口頭発表を英語で行う。

■授業内容

(回数、講義内容、担当者、対応 SB0s)

週	項目	内容
1	Introduction	Introductions; goals; policies; schedule; email; blogging
2	Presentation 1 intro	Writing #1 assigned; sample 1; writing guidelines
3	Current issues discussion	Discussion; listening; writing exercises; presentation sample
4	Current issues discussion	Writing #1 due; discussion; listening; writing exercises
5	Current issues discussion	Writing #1 returned; discussion; presentation prep
6	Presentation 1; Pres. 2 intro	Presentation #1; discussion; writing #2 assigned
7	Current issues discussion	Writing #2 due; discussion; listening; writing exercises
8	Presentation 3 intro	Writing #2 returned; presentation prep; writing #3 assigned
9	Presentation 2	Presentation #2; discussion; listening; writing exercises
10	Current issues discussion	Writing #3 due; discussion; listening; writing exercises
11	Current issues discussion	Writing #3 returned; discussion; presentation prep
12	Presentation 3	Presentation #3; discussion
13	Current issues discussion	Discussion; speaking & listening exercises
14	Current issues discussion	Discussion; speaking & listening exercises
15	Conclusion	Discussion; speaking & listening exercises

■アクティブ・ラーニングの取り組み

- ・ レポート提出を3回させている。
- ・ プレゼンテーションを3回させている。
- ・ SGDを毎回実施している。

■成績評価方法

- | | |
|---------------------------|-----|
| ・ 出席・ディスカッション参加パフォーマンス | 30% |
| ・ プレゼンテーションのライティングパフォーマンス | 30% |
| ・ プレゼンテーションのスピーキングパフォーマンス | 20% |
| ・ 授業中や宿題として行なう小課題 | 20% |

■教科書

なし。プリントのためのフォルダーが必要。

■オフィスアワー

- ・ 授業前後の時間
- ・ いつでもメールで連絡してください。 kjmilller@tsurumi-u.ac.jp

■準備学習（予習・復習等）

プレゼンテーションの前に行うこと。まずリサーチをすること。リサーチした内容をもとに英語で原稿を作成すること。作成した原稿をミラー先生に見せてチェックを受け修正をすること。修正した原稿でかならずプレゼンテーションをすること。

■学生へのフィードバック

プレゼンテーションのライティング/スピーキングパフォーマンスに対して対応する。

■備考

全3回のプレゼンテーションを実施しないと不合格。

英語特論Ⅱ Epidemic!

1 年次後期 2 単位

担当者 : Donna McInnis

■ 学習目標 (G10)

Quick to spread and develop resistance to medical intervention, new strains of microbes pose a growing threat to global health. How does overuse of antibiotics actually encourage more lethal strains of diseases believed to be conquered? How can the media successfully inform the public without causing panic? And should personal rights be curtailed during epidemics? In this course we will examine the biological, ecological, and cultural factors influencing the causes, spread, and control of infectious diseases. Students will engage in case study and role-play to critically think about the real challenges that we face and to work creatively to come up with solutions and alternatives to coping with these challenges not only in the classroom but in their future professional lives.

■ 行動目標 (SBOs)

Students will have the opportunity to actively improve their study skills and engage in the following skill areas:

1. Listening and Note making
2. Note making from Reading
3. Reading for Discussion and Role-Play
4. Vocabulary Building
5. Building Confidence in English
6. Writing Summary and Reaction
7. Research Skills
8. Internet Research
9. Independent Study

■ 講義内容

Week 1: Introduction to Course

(対応 SBO1~9. 毎回の Scenario の例を通じて SBO1~9 を総合的に訓練する)

Weeks 2-4: Scenario 1

Weeks 5-7: Scenario 2

Weeks 8-10: Scenario 3

Weeks 11-13: Scenario 4

Weeks 14-15: Presentations and Conclusion to Course

■ 成績評価方法

Attendance, Homework, Preparation for Class, In Class Participation (speaking and working together), Final Project - Research